

原作 エド・マクベイン「キングの身代金」

脚本 小国秀雄

菊島隆三

久坂栄次郎

黒澤 明

122 刑務所・面会室

権藤が入って来る。

小さな丸い穴をあけた厚いガラスと金網で仕切られた二つの部屋。

その金網の向こうの鉄の扉が開き、看守に連れられて竹内が入って来る。

竹内を残看守部屋の外へ出る。

明るくよそおう竹内。

竹内「やあ、権藤さん……どうも、わざわざ……」

竹内、じつと権藤を見つめる。

権藤も竹内を見つめる。

暫く見つめ合っている竹内と権藤。

竹内の笑みを浮かべた顔がこわばり、変にギクシャクした様子で権藤から眼をそらす。

竹内「元気そうですね……」

権藤はそういう竹内を落ち着いた眼で見つめている。

竹内「今、何をしたらっしゃるんです？」

権藤「相変わらず靴をつくっているよ」

竹内「(意外そうに眼を上げる)」

権藤「小さな会社だが、それを私にまかせてくれると言う人が居てね……私は今、それをナショナル・シューズに負けない会社にするつもりで頑張っている」

竹内「……」

また、しばらく沈黙が続く。

竹内「(急にいらいらしだす) どうして、そんな顔で私を見るんです。私はこれから殺される。でも、それを怖れてなんかいませんよ、だから、そんな憐れむような目つきで私を見

るのはやめて下さい」

権藤「……」

竹内「それがいやだから、私はきょうかいし教誨師もことわったんです。悔くい改めたり神様にすがつたり、どうして私までがそんなつまらないことをしなけりやならないんです？ 私はね、親切的な気持ちで嘘を言われるより、残酷な気持ちで本当のことを言って貰う方がいいな」

権藤「……」

竹内「ところで、権藤さん、私が死刑になってうれいしでしよう」

権藤「……」

竹内「うれしくないんですか？」

権藤「どうして、そんなことを言うんだ、君は。何故、君と私を憎みあう両極端として考えるんだ」

竹内「何故だかわかりませんね、私には自己分析の趣味なんかありませんからね……ただ……私のアパートの部屋は、冬は寒くて寝られない、夏は暑くて寝られない……その三畳から見上げると、あなたの家は天国うちに見えましたよ……毎日見上げているうちに、だんだんあなたが憎くなつて来た、しまいには、その憎悪ぞうおが生甲斐いきがいみたいになつて来たんですよ」

権藤「……」

竹内「それにね、幸福こうふくな人を不孝にするつてことは、不幸な人間にとつちやなかなか面白いことなんですよ」

権藤「君は、そんなに不幸だったのかね」

竹内「身の上話でもしろつて言うんですか……真つ平ですね……私は、自分がどんなに不幸せだったかなんて話して、今更同情なんかして貰いたくありませんよ……さいわい、お袋も去年死んで、胸糞の悪いメソメソした幕切れにならずにすんで、本当によかったと思つているんですよ」

権藤「それで君は、一体、何のために私を呼んだ」

竹内「私が泣き喚いたり、びくびくしたり、みじめつたらしく死んだなんて、あなたに想像されるのはたまりませんからね」

竹内は笑顔をつくる。

しかし、その笑顔とは裏腹に両手がブルブルふるえ出す。

竹内、その両手のふるえを押さえようとするが止まらない。

竹内「この手がふるえているのは、おびえているからだと思うでしょう……ところが、ぜんぜん関係ないんだな……  
永い間、独房に入れられているところなんです……単なる生理的現象ですよ……独房から出されただけでふるえて来るんです、本当ですよ……私は死刑なんか怖くもなんともない、地獄へ行くのも平気だ……生まれた時から地獄みたいな生活に慣れているんです……フフフ……天国へ行けなんて言われたら、それこそ本当にふるえ上がるかも知れませんかね……ハハハ……」

竹内、急に両手で頭をかかえ、体をふるわせているが、突然立ち上がり、金網をつかみ、

「畜生ツ!!」

と、絶叫する。

看守二人、慌てて飛び込み竹内を連れ去る。

同時に権藤の目の前に鉄板の戸が降りて来る。

凝然とその戸を見つめて動かない権藤。

ガラスに映る、その権藤の顔。

竹内のわめく声が泣き声になって遠ざかる。